

民子のエッセイ

“「かげろう日記」の女”

「読売ブッククラブ」1979(昭和54)年4月1日掲載



▲写真「59歳頃の民子」  
1978(昭和53)年撮影

風邪が長引いて仕事が手につかないままに、平安朝の女流日記を次々に読んで十日ほど過ごした。読み返すたびにそれぞれに興味が増えなから、「かげろう日記」の作者道綱の母の生き方は、一千年も後の世をきている私自身のまるで分身であるかのように近づいて来るから不思議である。(中略)内裏に行くと言って出かけた兼家を、彼女は家人に尾行させて、夫の新しい愛人の居所をつきとめさせるのである。それは町の小路を住む女と分るが、つきとめてみたところで心が晴れるはずもなく、あまつさえ二、三日おいて兼家が深夜に訪ねて来た時も、迎え入れようとはしなかった。夫はあきらめてまた小路の女の所へ行ったらしい、と彼女は記す。その夜眠れぬままに朝を迎えた道綱の母は、兼家にもとへ、かの有名な一首を届けさせるのであった。

なげきつつひとりぬる夜のあるまはいかにひさしきものとかはしる\*

(中略) 門の戸をいつまでもたたき続けてほしいと願う彼女の本心を知ろうともせず、夫はさっさと別の女のもとへと去ってしまう、その後の長い一夜の苦しみが、百人一首にも選ばれたこの歌を作らせたのであった。兼家には七人ほど妻がいたともいわれるが、一夫多妻の王朝時代に、相手がいかに一世の権力者であろうと、第二夫人として妥協して生きるのには、道綱の母は潔癖に過ぎ、情が濃過ぎたのでもあったろう。二人の間はしだいに離れていく。(中略) その過程でまた、過ぎた日々の悲しみを新たにし、傷を深くしていく。そうした経緯が、時代を超えて同じ物書きの一人である私の共感をそそののらうと思う。

\*現代語訳：嘆きながら独り寝をする世の明けるまでが、どんなに長くつらいものか、おわかりでしょうか  
門を開ける間さえ待ちきれぬあなたでは、おわかりになりますまいね

主な参考文献

- 『私の短歌入門』山本友一/編 有斐閣 1977年
- 『回想の大西民子』北沢郁子/著 砂子屋書房 1997年
- 『源氏物語の女性たち(NHKライブラリー67)』瀬戸内寂聴/著 日本放送出版協会 1997年
- 『源氏物語千年のかがやき-立川移転記念特別展示図録-』人間文化研究機構国文学研究資料館/編 思文閣出版 2008年
- 『日本の古典をよむ7 土佐日記 蜻蛉日記 とはすがたり』小学館 2008年
- 『上村松園・松篁・淳之 三代展』読売新聞大阪本社/編集・発行 2009年
- 『源氏物語を彩るひとびと』米田明美/著 中葉芳子/著 青簡舎 2015年
- 『源氏物語を読む』高木知子/著 岩波書店 2021年
- 「短歌」1982(昭和57)年8月号 角川書店
- 「波濤」2003年11月号 波濤短歌会事務局
- 「公益社団法人 能楽協会 ホームページ」<https://www.nohgaku.or.jp/>



大西民子  
生誕100th

大西民子 (1924~1994)

戦後を代表する女流歌人のひとり。  
岩手県盛岡市出身。25歳の時に大宮へ移り住む。自身の日常生活を赤裸々に詠んだ第一歌集『まぼろしの椅子』で注目を集める。『風水』で遼空賞を受賞。紫綬褒章受賞。1994年死去、享年69。



2024年7月10日  
さいたま市立大宮図書館  
さいたま市大宮区吉敷町1-124-1  
電話 048-643-3701 FAX 048-648-8460

# 大西民子と源氏物語

## 民子が愛した平安文学

2024年7月10日(水)~10月6日(日)

No	種別	内容	所蔵
1	自筆原稿	「私の短歌入門」	
2	自筆原稿	「源氏物語の女君」大西民子 筆「短歌」昭和57年8月号掲載	
3	雑誌	「短歌」昭和57年8月号 1982年刊行 角川書店	
4	自筆原稿	「魂の剥離」大西民子 筆	
5	自筆原稿	「先日、能楽堂……」大西民子 筆	
6	自筆原稿	「不和にさへ今は慣れつつ夜半獨り源氏物語讀みつぎてゆく」	
7	書籍	『光たばねて』大西民子 著 波濤短歌会 編 1998年刊行・初版 短歌新聞社 掲載歌「源氏物語宿木のなかの古女ふるをんなとは老いたるをんな」	
8	タブロイド紙	「読売ブッククラブ」1979(昭和54)年4月1日 掲載記事「「かげろう日記」の女」大西民子 著	
9	自筆原稿	「物語」大西民子 筆	
10	自筆原稿	「女性と歌と一更級日記によせて」大西民子 筆「朱扇」1952(昭和27)年6月号掲載	
11	自筆原稿	「貝あわせ」大西民子 筆「目の眼」1980年8月号掲載	
12	民子所蔵	民子手作りノート	
13	絵	復刻版「紫式部日記絵巻」五島本第3段(復刻日本古典文学館) 1973年刊行 日本古典文学刊行会	
14	和装本	復刻版「源氏物語」「ゑあはせ」「みゆき」「かしは木」中山家本(復刻日本古典文学館) 紫式部 著 日本古典文学館 編 1972年刊行 日本古典文学館	
	絵(複写)	「源氏五十四帖」より「十七 絵合」「廿九 御幸」「卅六 柏木」 尾形月耕 作 横山良平 出版者 1892~93(明治25~26)年	国会図書館
15	和装本	復刻版「枕草子」上巻 中巻 下巻 大東急記念文庫蔵枕草紙解題(復刻日本古典文学館) 清少納言 著 池田利夫 解題 1974年刊行 日本古典文学刊行会	
16	書籍	『源氏物語』上巻 紫式部 著 本居豊穎 校訂 古谷知新 校訂 1913年刊行 国民文庫刊行会 『源氏物語』4巻、9巻、10巻、11巻 紫式部 著 谷崎潤一郎 訳 1939年刊行 中央公論社 『校註源氏物語 はばさぎ(抄)』 紫式部 著 久松潜一 校閲 松尾聡 校註 1943年刊行 東京武蔵野書院 『対校源氏物語新訳』2~6巻 吉澤義則/著 1941年刊行 平凡社 『源氏物語私見』円地文子 著 1979年刊行 新潮社 『源氏物語の女』若城希伊子 著 1979年刊行 日本放送出版協会	

所蔵欄に記載がない資料は、大宮図書館所蔵です

# 1 民子と源氏物語

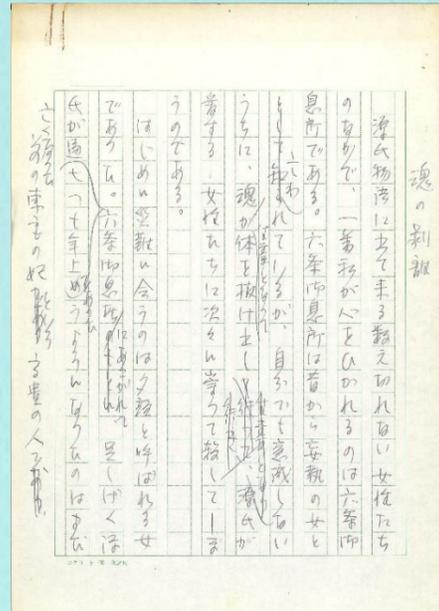
大西民子は高等女学生の頃から読書家で、奈良女子師範学校の文科に進学すると、在学中には日本文学などを学びました。また、短歌の師・木俣修からは古今東西の文学作品を学ぶように教えを受けていたといひます。

高等女学校で国語の教員をしていた民子にとって、古典は得意な分野のひとつでしたが、中でも源氏物語の世界に魅了され、物語を題材にした短歌も詠んでいます。

「不和にさへ今は慣れつつ夜半獨り  
源氏物語讀みつぎてゆく」(No.6)

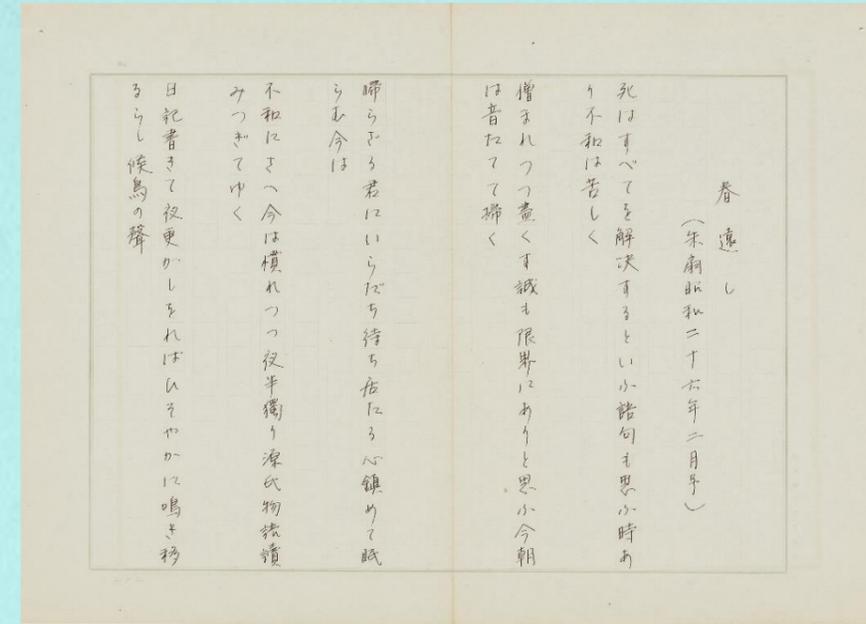
「源氏物語宿木のなかの古女  
ふるをんなとは老いたるをんな」(No.7)

また、民子は物語の中で、「六条御息所」を一番好きな人物としてあげています。恋人・光源氏との関係に苦しむ御息所の姿に、民子は惹かれるものがあったのでしょうか。



▲自筆原稿 (No.4)  
「魂の剥離」

民子が、六条御息所について解説したエッセイです。御息所は、自分でも気づかないうちに魂が体を抜け出して生霊となり、源氏の愛する女性たちを祟ったことや、源氏とどのように出会ったのかという経緯に触れられていないことが書かれています。



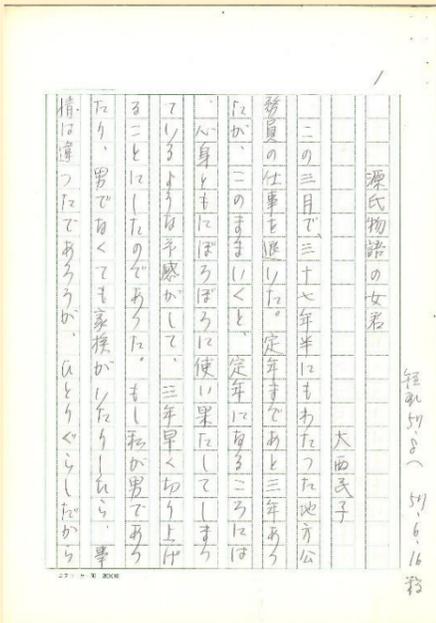
◀自筆原稿 (No.6)  
「不和にさへ今は慣れつつ夜半獨り  
源氏物語讀みつぎてゆく」  
結婚してまもないころ民子が作った歌です。夫との仲違いで苦しんでいた民子でしたが、今は不和にさえ慣れてしまい、夜中ひとり源氏物語を読んでいると歌っています。源氏をとりまく女性たちの生き様に、民子は何を思ったのでしょうか。

民子が所有していた「源氏物語」の本 (No.16) ▶  
民子が所有していた谷崎潤一郎訳『源氏物語』は、小説家の谷崎が源氏物語を現代語に訳したものです。奈良女子高等師範学校の卒業研究に谷崎を選ぶほど作品が好きだった民子は、谷崎訳の源氏物語も読んだことがあると、エッセイ「源氏物語の女君」(No.2)で書いています。4巻表紙には、「かんの」(民子の旧姓)と印が押されています。



## 民子のエッセイ「源氏物語の女君」

「短歌」1982(昭和57)年8月号掲載



▲自筆原稿 (No.2)

以前、源氏物語の女君たちのなかで一番だれが好きか、と問われて、即座に「六条御息所」と答えて不思議がられたことがあったが、今でもやはり一番心をひかれるのが六条御息所である。能の『葵上』などに扱われて、嫉妬に狂う女、物の怪になってたたる女、というように決めてかかれがちであるが、そうとばかりは言い切れないような気がしてならないのである。源氏物語のなかにはじめて御息所があらわれてくるのは、「夕顔」の巻のはじめの部分である。(中略)少し寝入ったころ、源氏は枕がみに「いとをかしげなる女みて」、私のところを訪ねては下さらないで、このようなところに別の人と共におられるのを見るのは苦しい、などと言ひ、かたわらの夕顔に手をかけようとした。(中略)源氏が宿直のところまで行って戻ってくると、もう夕顔は息絶えていて、灯火を寄せて見ようとすると、先刻源氏の夢枕に立った女の影がまた見えて、たちまち消えてしまう。源氏はまだそのころ十七歳ほどであったという。夕顔を手にかけたその「いとをかしげなる女」を、六条御息所の生き霊と見る説と、その廃邸に昔からついていた霊と見る説と両方あるようだが、前後の文章やその後の物語の展開などから推して、御息所の生き霊と考えるのが自然のように私には思われる。

以前、源氏物語の女君たちのなかで一番だれが好きか、と問われて、即座に「六条御息所」と答えて不思議がられたことがあったが、今でもやはり一番心をひかれるのが六条御息所である。能の『葵上』などに扱われて、嫉妬に狂う女、物の怪になってたたる女、というように決めてかかれがちであるが、そうとばかりは言い切れないような気がしてならないのである。源氏物語のなかにはじめて御息所があらわれてくるのは、「夕顔」の巻のはじめの部分である。(中略)少し寝入ったころ、源氏は枕がみに「いとをかしげなる女みて」、私のところを訪ねては下さらないで、このようなところに別の人と共におられるのを見るのは苦しい、などと言ひ、かたわらの夕顔に手をかけようとした。(中略)源氏が宿直のところまで行って戻ってくると、もう夕顔は息絶えていて、灯火を寄せて見ようとすると、先刻源氏の夢枕に立った女の影がまた見えて、たちまち消えてしまう。源氏はまだそのころ十七歳ほどであったという。夕顔を手にかけたその「いとをかしげなる女」を、六条御息所の生き霊と見る説と、その廃邸に昔からついていた霊と見る説と両方あるようだが、前後の文章やその後の物語の展開などから推して、御息所の生き霊と考えるのが自然のように私には思われる。

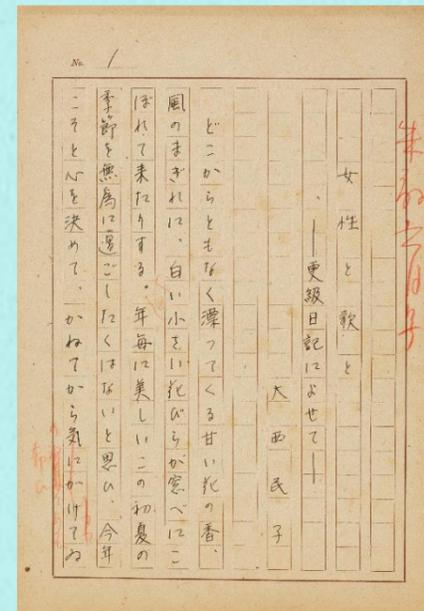
## 2 民子と平安文学

民子は、「蜻蛉日記」や「更級日記」など、源氏物語以外にも、エッセイの中で民子はしばしば古典について触れています。中でも、「蜻蛉日記」の作者に共感していたようです。

蜻蛉日記は、「藤原道綱母」が自身の半生を綴った日記です。彼女は、藤原兼家と結婚して子供(道綱)を授かりますが、夫の行動を不審に感じ調べてみると、別の女性のもとへ通っていることが分かります。やがて夫婦の関係には溝ができるようになり、道綱母は息子の成長を心の支えに、夫の訪れを待ち続ける日々を送りました。

そんな彼女の生き方は、約10年間別居生活を過ごした民子の人生にも繋がる部分があります。民子はエッセイ「かげろう日記の女」(No.8)の中で、次のように書いています。

「道綱の母の生き方は、一千年も後の世を生きている私自身のまるで分身であるかのように近づいて来るから不思議である」



▲自筆原稿 (No.10)

「女性と歌と一更級日記によせて」  
民子が、更級日記について書いたエッセイです。作者の菅原孝標女は、物語好きな文学少女で若い頃は源氏物語などの文学に夢中になっていました。しかし、華やかな創作の世界とは違って、孝標女のその後の人生は、夫に先立たれるなどして寂しいものだったと民子は書いています。